

[論文]

# ロバート・ブルースにおける聖餐 (1)

——『主の晩餐の秘義』をめぐって：総論——

原 田 浩 司

## はじめに

本論文は、十六世紀から十七世紀にかけて活躍したスコットランドの牧師ロバート・ブルース (Robert Bruce: 1554-1631 年) による説教集『主の晩餐の秘義 (*The Mystery of the Lord's Supper*)』<sup>1</sup> を読み解くことを通して、彼の聖餐論を呈示し、その特徴を把握すると共に、今日的意義を考察することを目的とする。

本稿で照明を当てるロバート・ブルース (以下「ブルース」と略す) については、これまで日本で紹介される機会がなかったため、知名度は皆無と言ってよい。しかし、日本のみならず、スコットランドにおいてですら、二十世紀の実践神学の領域でブルースに言及され、彼の思想が論じられることはほとんどなかった<sup>2</sup>。しかしながら、ここ最近の十年あまりの動向として、ブルースに言及する書物などが目立つようになってきたことは注目に

<sup>1</sup> 正式な表題は '*The Mystery of the Lord's Supper: Sermons on the Sacrament preached in the Kirk of Edinburgh by Robert Bruce in A.D. 1589*'。

<sup>2</sup> たとえば、二十世紀スコットランドの礼拝学の第一人者、William D. Maxwell による『スコットランド教会における礼拝史 (原題: *A History of Worship in the Church of Scotland*, Oxford University Press, 1955)』にブルースの名は出てこない。また『スコットランド礼拝史研究 (原題: *Studies in the History of Worship in Scotland*, T & T Clark, 1984)』でも、十六～十七世紀を執筆担当した Gordon Donaldson もブルースについては一切言及していない。さらに、George B. Burnet はその著『スコットランドの改革教会における聖餐 (原題: *The Holy Communion in the Reformed Church of Scotland 1560-1960*, Oliver & Boyd, 1960)』で、一か所だけブルースについて言及する部分があるものの、それはブルースが初めて聖餐式を執行了際のエピソードであり、彼の聖餐論が呈示されているわけではない (40 頁)。また William McMillan による『スコットランド改革教会の礼拝 1550-1638 (原題: *The Worship of the Scottish Reformed Church, 1550-1638*, The Lassodie Press, 1931.)』でブルースが扱われるのは、聖餐の文脈ではなく「按手礼による牧師任職」の問題について論じる場面である (pp. 346-7)。このように、スコットランドでも二十世紀の実践神学領域では、ブルースの聖餐論はほとんど無視されていたことが伺える。またブルースについて記された単行本は D.C. MacNicol, *Robert Bruce: Minister in the Kirk of Edinburgh*, The Banner of Truth Trust, 1961. の一冊しか存在しない。

値する<sup>3</sup>。

今日、我々が入手できるブルースの説教集『主の晩餐の秘義』はトーマス・F・トーランスの編集によるものであり、これは最初に1958年にJames Clarke社から出版され、その後しばらく絶版状態だったが、2005年にRutherford HouseとChristian Focus社が共同の出版元となり、ペーパーバック版で新装再版されている。編集者のトーランスはこの説教集についてこう述べる：

歴史的に著名な、 sacrament をめぐるロバート・ブルースの説教集は、若き日の私の神学的な慣習において、不可欠なもの、また忘れ難いものとなった。私は、家庭ではそれらに養育され、後に神学生としてエジンバラ大学ニュー・カレッジにきた時も、H.R. マッキントッシュ教授から何度も強く薦められて、夢中になってそれらにより深く学んだ。マッキントッシュ教授自身が講じる主の晩餐についての講義は、ブルースの説教集から多大な示唆を受けたものであり、これまで以上に、それらをスコットランド教会における sacrament の伝統のまさしく核心の部分として尊ぶべきことを教わった。<sup>4</sup>

この引用から、トーランスが「スコットランド教会における sacrament の伝統のまさしく核心の部分」としてブルースの説教集において提示される聖餐論を非常に高く評価しているのが分かる。さらに、マッキントッシュ教授への言及がみられるように、実はエジンバラ大学ニュー・カレッジの歴代の神学教授たちがブルースの説教集『主の晩餐の秘義』と深く関わってきた。この説教集は、初めて出版された1590年以降、編集者を変えて出

<sup>3</sup> 例をあげれば、Ian H. Murray, *A Scottish Christian Heritage*, The Bunner of Truth Trust, 2006. では、第二章がブルースの生涯が丁寧に記されている (pp. 37-72. を参照)。また、Malcolm Maclean, *The Lord's Supper*, Mentor, 2009, pp. 89-91. および、Ian D. Campbell & Malcolm Maclean (ed.), *The People's Theologian: Writings in Honour of Donald Macleod*, Christian Focus Publications, 2011, pp. 75-88. では、編者の一人マルコムが「ロバート・ブルースと主の晩餐」とのタイトルで一章を費やし、ブルースの聖餐論を論じている。ロバート・リーサムは『主の晩餐：現代アメリカにおける聖餐への問い』（拙訳、一麦出版社、2007年〔原著は2001年に出版〕）の冒頭の扉に、ブルースの『主の晩餐の秘義』からの言葉を掲げることから、論じ始めており、2007年の日本語版の出版の際に寄稿した序文の中で「スコットランドの偉大な神学者であるロバート・ブルース」と記述している。書物以外でも、ドナルド・マクラウドは「スコットランドの教会の礎を築いた人物たち」と題する五回の連続講演（1999年）で、ジョン・ノックス、ロバート・ブルース、サミュエル・ラザーフォード、トーマス・ボストン、トーマス・チャーマーズの五名を取り上げて講じている (<http://www.falkirkfreechurch.com/video> を参照)。分けても、十六～十七世紀の重要人物として、『第二規律の書』作成に携わった代表的人物のアンドリュウ・メルヴィルではなくブルースが取り上げられている点に注目したい。このように、比較的最近の動向として、ブルースが取り上げられる機会が増え、ブルースが再評価されていることがはっきりと窺える。

<sup>4</sup> Robert Bruce, (ed. Thomas F. Torrance), *The Mystery of the Lord's Supper*, Rutherford House & Christian Focus, 2005, p. iv.

版され続けてきた。スコットランドでは、1843年にウィリアム・カニンガム (William Cunningham: 1805-61年) の編集によって、さらに1901年にはジョン・レイドロウ (John Laidlaw: 1832-1906年) の編集によって出版されているが、二人ともニュー・カレッジの神学教授だった<sup>5</sup>。こうした経緯からも、先のトーランスの引用が示すように、牧師を志す神学生たちが、代々、彼らから教わる聖餐論は、少なからずブルースから影響を受けていたことは十分に考えられ、後にトーランスが編集者になったのは、そうした学統の必然的な帰結だったと言えよう。

このように、スコットランド神学界を牽引してきたニュー・カレッジの歴代の教授たちが重んじてきたものの、二十世紀の実践神学の領域ではほとんど顧みられず、しかし近年、再評価されているこのブルースの説教集を丁寧に読み解き、その要点を明らかにしていく。

それに先立ち、この説教を語ったロバート・ブルースとはいかなる人物なのか、簡潔に整理しておく。

## 1 ロバート・ブルースとは

### 1.1 略 伝<sup>6</sup>

ロバート・ブルースは1554年に、エジンバラとスターリングのほぼ中間地点にあるキンナードで生まれた。彼の父はアリスのアレクサンダー・ブルース伯、そして母はジャネット・リヴィングストンで、ジャネットは国王ジェームズ一世のひ孫にあたる。つまり、彼は王家の血を継ぐ家系の出身であり、このことから、十六世紀の当時においては、相当に裕福な家庭環境で育ったことが窺い知れよう。

ブルースは1572年にセント・アンドリュース大学 (セント・サルバートル・カレッジ) で人文学を修め、それから法学 (民法) を修めるためにフランスとルーヴェンに留学した。帰国後は、父親の世話で法科大学の教師となるものの、献身の志が与えられ、再びセント・

<sup>5</sup> Ibid., p. v (preface). カニンガムは1843年の教会大分裂に伴うニュー・カレッジ創設時 (1844年) に教会史の教授に就任し、1847年に二代目の学長となった。レイドロウは1881年から1904年までの二十年以上にわたりニュー・カレッジの組織神学教授を務めた。ヒュー・R・マッキントッシュはレイドロウの後任として組織神学教授に就任した。

<sup>6</sup> この部分は、基本的にI.R. Torrance, 'Bruce, Robert (c.1554-1631)', *Dictionary of Scottish Church History & Theology*, pp. 104-105. に基づいて構成される。ただし、他者による記述と比べて一致しない記述については修正し、また、彼が言及していない点は加筆した。例えば、ここでは、ブルースが最初にセント・アンドリュース大学で学んだものを「法学」と記すが、ウッドローによれば「人文学」である。ここでは後者の見解を採用し、修正した。なお、ウィキペディアのRobert Bruceの頁も参考になる ([http://en.wikipedia.org/wiki/Robert\\_Bruce\\_\(moderator\)](http://en.wikipedia.org/wiki/Robert_Bruce_(moderator)))。ただし、二度目のインヴァネス追放の記事に不正確さがあり、ブルースが1620年に追放された掲載されているが、1622年の誤りである。

アンドリュース大学（セント・メアリー・カレッジ）で神学を学び始めた。そしてこの間に、彼に多大な感化を及ぼしたのが神学教師のアンドリュー・メルヴィルだった。1587年に神学を修めたブルースは、セント・アンドリュース・プレスビテリーで牧師に叙任され、メルヴィルの推薦により、改革者ノックスが牧師を務めていたセント・ジャイルズ教会の牧師となる（33歳）。それから間もなく、1588年2月に開催された全体総会で、早くも彼は総会議長に選出された。こうした一連の大抜擢から、ブルースに対する当時の評価と期待の高さが如実に窺えよう。

1589年には国王ジェームズ六世によって枢密院の議員に選定され、1590年にはデンマークから娶ったアン王妃に塗油の儀式を行う執行者となった。スコットランド議会で「黄金法」が承認された1592年に、ブルースは再度、総会議長に選出されている。ブルースが37歳の時である。この年は、スコットランドにおいて教会と国王との関係が最も良好な時だったと言える。しかし、この関係は長くは続かず、1596年から両者の関係に深刻な亀裂が生じていく。そうした中で、王家から教会に寄せられる不満は遠縁の親族にあたるブルースに集中して寄せられるようになる。1598年には、ブルースは「按手」を伴う牧師任職式を執り行っていないことや、故郷アープロース教会地の地代収入を得ていることなど、彼は王から諮問される身となる。1600年に起きたガウリー陰謀事件<sup>7</sup>を機に、ブルースは説教壇から王の悪政を批判し始める。一方、国王ジェームズはこれに対して公式な謝罪文の提出を勧告し、提出のない場合には厳罰に処すと宣告するが、ブルースは謝罪文の提出を堅く固辞した。こうして、ブルースに国外追放の処分が下され、フランスへ追放されることになる。翌年1601年にはスコットランドへの帰国が許されたものの、キンナードの実家での謹慎処分となる。しかし、1605年にはスコットランド北部のインヴァネスに追放され、1613年までの八年間をその地で過ごした。1613年から1622年まで、再びキンナードでの謹慎が言い渡されたものの、教会での説教活動を盛んに続けていたため、1622年には二度目となるインヴァネスへの追放処分となり、二年間そこに滞在した。1624年に再び故郷のキンナードに戻り、1625年から同じ地区にあるラーバートの教会形成のために力を尽くし、1631年に亡くなった。

ブルースは最後に仕えたラーバートの教会の説教壇の足元に埋葬され、後代に場所は移

<sup>7</sup> プレスビテリアンを支援していた第三代ガウリー伯が、パースの自宅にジェームズ国王を招待した際、国王暗殺の陰謀を企てていたとの嫌疑をかけられ、逆にその場で殺害された事件。ブルースら、プレスビテリアンの牧師たちは、これをジェームズ国王による事実無根の言いがかりとして批判した。トマス・ブラウン（松谷好明訳）、『スコットランドにおける教会と国家』、すぐ書房、1986年、99頁を参照。

動されたが、現在残されている彼の墓標には、フィリピの信徒への手紙から「*Christus vita et in morte lucrurum* (生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです)」とのパウロの言葉が刻まれている<sup>8</sup>。

## 1.2 「説教者」ブルース

ブルースは著作を次々に生み出す執筆家ではなかった。彼は説教を語り続け、教会と共に生きた牧会者だった。『主の晩餐の秘義』も聖餐について論じた神学論文集ではなく、セント・ジャイルズ教会の説教壇から語られた説教の集成である。ブルースを理解するためには、「聖餐」の文脈からだけでなく、「説教」というパースペクティヴからも捉えていく必要がある。

まず彼と同時代の人々よるブルースについての証言を幾つか集めてみると、十七世紀スコットランド教会史において重要な役割を担ったアレクサンダー・ヘンダーソン (Alexander Henderson : 1583-1646)<sup>9</sup> は、ブルースの説教と深い縁があることに気づく。ヘンダーソンは、1614年頃までは、主教制度 (Episcopacy) の支持者の一人とみなされていた。彼は1614年に牧師としてルーチャーズ教会に着任したが、この人事異動は長老派の有力な地主たちが願っていたものではなかった。苦悩していたこの牧師は、ある日秘密裏にブルースの説教を聞きにフェルガンに足を運び、そこでブルースが語る説教を聴いて、長老派に回心したというエピソードがある<sup>10</sup>。また、ブルースと同時代の牧師ジョン・リヴィングストン (John Livingstone : 1603-72) による次の回想がこの説教集の序文の中で引用されている：「わたしは何度もロバート・ブルース師の説教を聞いたが、個人的な意見を申し上げれば、使徒たちの時代以降、これほどまでに力強く語る人は一人もいなかったであろう」<sup>11</sup>。さらに、ほぼ同時代の牧師ロバート・フレミング (Robert Fleming : 1630-94) も説教者ブルースについてこう記録している：「彼 (ブルース) がエジンバラの牧師の務めた期間、彼が説教する御言葉において働いておられるのがかなりはっきりと分かる聖霊の力と効果を、この島全土を照らす大きな光として輝かせた」<sup>12</sup>。これら同時代人らによる三つの事例や証言は、説教の務めを等しく担う同労者たちからブルースに寄せられる「説教者」

<sup>8</sup> Bruce, op. cit., p. viii.

<sup>9</sup> ヘンダーソンは『国民契約』の締結 (1638年) の主導者であり、『厳粛な同盟と契約』 (1643年) の起草者、そして1643年7月から開催されたウェストミンスター神学者会議にスコットランドからの特命委員を務めた長老派の牧師。

<sup>10</sup> F.D. Douglas, 'Henderson, Alexander (1583-1646)', *Dictionary of Scottish Church History & Theology*, p. 397. を参照。

<sup>11</sup> Bruce, op. cit., p. viii.

<sup>12</sup> Ibid., p. 9.

としての評価が非常に高いことが窺える。尤も、神学の学びを終えたばかりのブルースが、改革者ジョン・ノックスが牧師を務めたセント・ジャイルズ教会に牧師として招聘されたこと自体、彼に具わる説教の賜物の豊かさを暗示しているだろう。

また、ブルースは度たび国王ジェームズ六世と衝突し、そのため二度にわたってハイランド地方のインヴァネスに追放された（一回目：1605-13年，二回目1622-24年）。十七世紀初頭のスコットランドでは、未だ宗教改革陣営の牧師不足が深刻だった時期であり、必ずしも改革のうねりと福音宣教が地方の隅々にまで浸透していたわけではなかった。そうした中、二度にわたる追放の期間、ハイランドにおける改革教会の形成と福音宣教の担い手として重要な役割を担ったのが、他ならぬブルースだったと言われる<sup>13</sup>。さらに、ブルースの最晩年について、2005年の新装改訂版の編者であるシールズは序文でこう述べる：「ブルースはこの地[ラーバート]で、1625年から、逝去する1631年までの六年間、廃墟同然だった教会の再建に献身し、定期的に説教を語った。そして、日曜日毎に彼の力強い神の御言葉の説教を聞くために大勢の群衆がラーバートに押し寄せてきたことは何も驚くことではない」<sup>14</sup>。

これらブルースに対する同時代人らによる言及や、後代に記された言及を総合すれば、エジンバラで過ごした時期も、インヴァネスに追放処分された時期も、さらには故郷の近郊のラーバートで過ごした晩年の時期も、変わることなく、ブルースが人々からも同労者たちからも、傑出した「説教者」として評価され、尊敬されていたことが窺い知れよう。

最後に、説教集の序章に収録されているブルースの略伝より、その筆者ウッドローによるブルースに対する総評を紹介する：

教会史上、信仰への絶対的忠誠、全き敬虔さという点で、ブルースに比肩する人物は非常に稀である。彼が自分の人生で終始貫き通した断固たる高潔さと正義感そのものが、国家に大きな貢献を果たした。御言葉と sacrament の真の牧師の一人として、そしてどんな時も、どんな困難や挫折があっても、自らの教会員と共に生き、信仰厚く、温厚な一人の牧師としての彼の生きる姿は、その牧会において直接彼に従った人たちのみならず、数え切れないほどの大勢の人々を教導し、鼓舞し、そしてその人たちの中からは、スコットランドにおける福音伝道の聖職に招かれた人たちも多く現われた。ブルースは改革派教会の崇高な教理を直接的に個々人の良心に適用することで、

<sup>13</sup> 注2で例として挙げたマクラウドの連続講義では、特にこの点が強調されている。当時、日曜日になると、近郊の町や村からブルースの説教を聞くために、大勢の人々がインヴァネスに来ていた、と伝承されている。

<sup>14</sup> Bruce, op. cit., p. viii.

彼の教えに具わるインパクトはより一層大きなものとなった。<sup>15</sup>

ここには、説教者としてはもちろん、牧会者としてのブルースに対する評価が述べられている。分けても「改革派教会の崇高な教理を直接的に個々人の良心に適用する」との言及に注目したい。なぜならこの「教理と良心の統合」こそが、ブルースの説教のみならず、彼の聖餐論を理解する上での重要な鍵になると思われるからである。

上述のように、本論文で照明を当てる『主の晩餐の秘義』は、「説教者」としての評価の高いブルースが語った説教であるため、実際の修辞学的技法も含め、彼がどのような説教を語ったのかという点を重要視し、出来る限り彼自身の言説を引用しながら、ブルースの聖餐論を考察していく。

## 2. ブルースの聖餐論（総論）

『主の晩餐の秘義』には五編の説教が収録され、それぞれ第一説教が「 sacrament 全般の意味」、第二・第三説教が「主の晩餐の特徴」、そして第四・第五説教が「主の晩餐に与るための準備」について述べられる。特に第一説教が「総論」を成し、第二から第五が「各論」という位置づけとなる。ここではまず「総論」を成す第一説教をめぐり、彼の聖餐論の全体的な特徴を考察する。尚、この説教の土台となる聖書本文として掲げられているのは、コリントの信徒への手紙一 11 章 23 節、「わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り…」(新共同訳)である。

### 2.1 一体性

まず冒頭で、説教も sacrament も共に、人をキリストと一つに結び合わせるために神御自身が選んだ手段であり、さらに、これらにおける聖霊の働きによるキリストの現臨の霊的リアリティを重視する必要性が、このように指摘される：

この世で、否、この世を越えたところでさえ、あなたたち誰もが望むことにおいて、イエス・キリストと一つに結ばれること、しかもたった一度で、神の栄光なる主とまったく一体とされることに勝るものはない。こうした天的な喜ばしき一体性は、福音の御言葉の説教、そして sacrament の執行という二つの特別な手段によって私たちに備えられ、また私たちのものとなる。御言葉は聞くことによって私たちがキリストのもとに導く。そして sacrament は、目に見える仕方、私たちがキリストのもとに導く。神はその二つを、私たちがキリストへと導き、そしてキリストのもとに連れて

<sup>15</sup> Ibid., p. 17.

いくために最も相応しいものとして、お選びになられた。…(中略)…しかし、あなたたちが常に覚えておかねばならないことが一つある。それは、御言葉、すなわち説教についてであれ、また sacrament についてであれ、もしキリストが御自身の聖霊をそこから取り除かれても、なお私たちが突き動かすことができる、といった教えなどないということである。したがって、御言葉の説教についてにせよ、sacrament についてにせよ、あなたたちがその教えについて聞く時はいつでも、神が御自身の聖霊によって現臨しておられるかどうかが問われなければならない。<sup>16</sup>

ここでは「聖餐に与る者たちとキリストとの一体性」、また「聖霊と説教・sacrament との一体性」が呈示される。この冒頭から一貫して、ブルースがこの第一説教で主張するポイントは秘義としての「一体性」である。ブルースは主の晩餐にまつわる様々な局面を「関係性」から捉え、その関係における「一体性」を繰り返し主張する。この「一体性」はブルースの聖餐論においては最も基本的かつ、中心的な概念である。

## 2.2 説教と sacrament の一体性

次に「sacrament」という言葉の定義や、この言葉が、教父たちをはじめ、歴史的に使用されてきた経緯を簡単に論じた上で、ブルースは主の晩餐の sacrament を神の「恵みの契約の証印(シール)」<sup>17</sup>と捉え直す。「証印」はそれ自体では本来の意味を成さず、文章に貼られ、その文章と一体化してはじめて、その文書を権威あるもの、責任あるものとする。同様に、証印としての主の晩餐の sacrament は、説教に貼り付けられ、両者が一体となる時にこそ、真に意味のあるもの、権威あるものとして保証されることになる。そこで、ブルースは「説教と sacrament の一体性」をこのように強調する：

御言葉の証し(説教)と結びついていなければ、sacrament は存在し得ない。sacrament が何であるのかを考えていただきたい。実際に、それはそもそも何であるのか。それは普通のパンの断片なのか？ 神の言葉の証言と結びついていなければ、それは普通のパンのままである。それゆえ、御言葉だけをもって、sacrament に変えたり、その物素のままにしたりすることができるのではなく、御言葉と物素(パンとぶどう酒)の相互的な関係が、それを sacrament たらしめている。アウグスティヌスは「御言葉が物素に来てくださることで、あなたがたは sacrament に与れる」と見事に表現した。それゆえに、御言葉が物素に来てくださらなければ、つまり、sacrament に先立って御言葉がはっきりと説教され、sacrament のあらゆる部分につ

<sup>16</sup> Ibid., pp. 30-31.

<sup>17</sup> Malcolm Maclean, 'Robert Bruce and the Lord's Supper', *The People's Theologian*, p. 77.



いて解き明かされなければならず、しかも、それが sacrament にまで高めるのであり、証印としての sacrament は、それに付随し、またそこから生じてこなければならぬ。それゆえ、私は sacrament を御言葉と物素とが互いに結合した一体のものと呼ぶ。<sup>18</sup>

ここで明瞭に、御言葉の説教は sacrament に「先立つ」という関係で、両者の相互連関(一体性)が強調されている。

このように、第一説教は「関係性」と「一体性」の概念を下敷きにしつつ、幾つかの鍵となる要点を順次解説する、という仕方で聖餐論が展開されていく。その要点とは次のように整理することができる：① sacrament における「しるし」、② 聖霊のつとめ(ミニストリー)、③ しるしが示すのはキリストの断片ではなく、すべてである、④ キリストに与るために不可欠な信仰—「魂の口」、⑤ 霊的な命を養う霊的な糧、⑥ 主の晩餐に与るための準備の重要性—「悔い改め」の心、⑦ 「秘義」としての sacrament、⑧ 可視的なものと不可視的なもの—その区別、類比、そしてバランス、⑨ 私たちの内で生きるキリストを感得すること、⑩ sacrament を無益なものにする要因<sup>19</sup>。

以下、これらの要点に即して、ブルースの言説を考察する。

### 2.3 sacrament における「しるし」

主の晩餐において、ブルースが「しるし」と位置づけるのは「パンとぶどう酒」の物素だけではない。彼はこう述べる：「そこには二種類のしるしがある。一つは、私たちが物素と呼ぶパンとぶどう酒であり、もう一つは、それらが裂かれ、配餐され、執行されることによる、私たちが典礼と呼ぶ儀式、および祝いの式である」<sup>20</sup>。先に引用した冒頭部分の最後で、ブルースは「キリストの現臨」の重要性を指摘していた。聖餐における「現臨(Real Presence)」をめぐる十六世紀の議論では、おもに「パンとぶどう酒」の物素における現臨に照明が当てられがちなか中、ブルースは「聖餐式」自体がキリストの現臨の舞台であり、また「二種類のしるし」の一つと定義する。その上で、物素について、キリストが御自身をもたらず手段としてこれらの物素が定められた理由と目的を、ブルースはこう述べる：

私がそれらをしるしと呼ぶのは、それらにはキリストの体と血が結びついているから

<sup>18</sup> Bruce, op cit., p. 33.

<sup>19</sup> 説教集では実際には四つのパートに分かれ、それぞれのパートには、「1. sacrament においてしるしが示すもの」、「2. 示されたものが意味するもの」、「3. しるしと示されたものは連携する」、「4. しるしと示されたものはどのようにして届けられるか」という表題が付けられている。しかし、この表題ではブルースが論じる要所をきちんと把握することが難しいと思われ、論旨に即して、筆者がポイントを再構成したものである。

<sup>20</sup> Bruce, op cit., p. 35.

である。実際に、そして真実に、キリストの体はパンと結びつき、キリストの血はぶどう酒と結びついており、あなたたちがそのパンに与り、口に入れるやいなや（もしあなたたちが男であれ女であれ、信仰者であれば）、あなたたちは信仰によって、自らの魂において、キリストの体に与ることになる。さらに、あなたたちが自分の口でぶどう酒を飲むやいなや、あなたたちは信仰によって、自らの魂において、キリストの血に与ることになる。…（中略）… それらがしるしと呼ばれるのは、示されるものを伝え、明示するために、他ならぬ主が御自身の手で sacrament を命じたからである。福音の御言葉が我々の永遠の救いのための、力に満ち、かつ有力な手段であるのだから、それゆえ、sacrament も私たちの永遠の救いのために、私たちにイエス・キリストをもたらし、神によって定められた有力な手段である。なぜなら、この霊的な糧は、霊的な食卓において、すなわち御言葉の務めにおいて、また sacrament の務めにおいて、私たちに整えられ、振舞われるからであり、この務めは外的なものではあるものの、それでも尚、主がこれらの外的なしるしによって霊的かつ天的な事柄を伝えよ、と命じておられるからである…。<sup>21</sup>

#### 2.4 聖霊のつとめ（ミニストリー）

先の冒頭部の引用でも言及されていたように、説教と sacrament には、聖霊の働きによる「キリストの現臨」が不可欠である。この点を再確認し、ブルースはこのように述べる：

キリストは聖霊のつとめ（ミニストリー）によってもたらされる。聖霊は我々の心にキリストを証印するお方であり、そして、使徒が述べたように、キリストにおいて私たちがますます強めてくださるお方である（コロサイの信徒への手紙二 1: 22）。

厳密に言えば、父なる神、あるいはキリスト御自身以外には、キリストをもたらし力を持つ者はいない。キリスト御自身の霊以外には、仲介者をもたらし力を持つ者はいない。にもかかわらず、私たちにイエス・キリストをもたらしために幾つかの方法や手段が用いられることを、神は喜んでおられる。その手段とは、御言葉のつとめと sacrament のつとめである。そして、キリストをもたらし手段として、神がこれらをお用いになるがゆえに、それら（説教と sacrament）はキリストをもたらし、と言われるのである。<sup>22</sup>

ここでブルースが強調するのは、この地上に生きる人々にキリストをもたらし、キリスト

<sup>21</sup> Ibid., pp. 35-36.

<sup>22</sup> Ibid., pp. 36-37.

を与えることができる主体は神御自身以外にない、またそれゆえ、聖餐は主なる神が定められた「主の」晩餐であるという点だ。分けても、聖霊論の文脈において主の晩餐を捉え直す試みに着目したい。これはブルースがカルヴァンの聖餐論を継承していることを明示する証拠と言えよう。

### 2.5 しるしが示すのはキリストの断片ではなく、すべてである

ブルースにおいて、聖餐の「しるし」が示すものは、単に「肉」や「血」といったキリストの一部ではない。彼は、パンとぶどう酒、および聖餐式全体が示すもの、またそれらのしるしを通して与えられるものを「キリストの賜物と益と恵みの全体をもたらすキリストのすべて」<sup>23</sup>と表現し、このように述べる：

sacramentにおけるしるしによって示されているのは、神であり、かつ人であり、ご自身の本性を切り離すことなく、御自身の恵みから御自身の実体を分けることのない、キリストのすべてである、と私は言おう。なぜそう言えるのか？ もしパンによって示されているのがキリストの肉や体だけで、それ以上のものではないのならば、また同じく、ぶどう酒によって示されているのがキリストの血だけで、それ以上のものではないとすれば、それはただキリストの一断片にすぎないのだから、あなたがたはその（一断片の）キリストの体をもって「それはキリストである」とは言えない。同様に、それはキリストの一部にすぎないのだから、キリストの血をもって「それがキリストのすべてである」とは言えない。…（中略）…それゆえに、永遠の命を生きるために、 sacramentがあなたたちを養うには、 sacramentにおいて、キリストの実体がキリストの恵みから切り離されることなく、また、キリストの本性が他のものから切り離されることなく、あなたたちの救い主の（一部分ではなく）すべて、キリストのすべてに、あなたたちは与らなければならない。<sup>24</sup>

このように、主の晩餐の sacramentに与ることは、「肉」や「血」といったキリストの「断片」に与ることではなく、「キリストのすべて」に与ることであることが呈示される。

### 2.6 キリストに与るために不可欠な信仰 — 「魂の口」

そこで、ブルースは「どのようにして、私たちはキリスト（のすべて）に与れるのか？」との問いを、会衆に投げかける：

どのようにして、私たちはキリストに与れるのか？ 自分の口によってではない。私たちは自分たちの口で神に与る、などと考えるのは意味を成さない。そうではなく、

<sup>23</sup> Ibid., p. 38.

<sup>24</sup> Ibid., pp. 38-39.

私たちは信仰によって、キリストに与るのである。なぜなら、神は霊であるがゆえに、私は信仰によって、しかも心の底から信じることによって、キリストを食すのである。…（中略）…したがって、もしこれまで sacrament から善い益を受けていたならば、あなたたちはキリストのすべてに与っていたはずである。さらに、信仰以外に、あなたたちがキリストを保持する備えとなるような媒介などはない。それゆえ、信仰をもって、心から信じて、主の食卓に来ていただきたい。<sup>25</sup>

ここで指摘されるのが、「キリストのすべて」に与るために必要不可欠な媒介としての「信仰」である。信仰がなければ、キリストのすべてに与ることはできない。キリストの全てに与ることがなければ、聖餐は聖餐として「霊的な」糧また養いとして、全く意味を成さない。「それゆえ、信仰をもって、心から信じて、主の食卓に来ていただきたい」とブルースは会衆に語りかける。

## 2.7 霊的な命を養う霊的な糧

さらに、パンとぶどう酒が「霊的な」養いとして備えられている点が強調される：

それが霊的と言われるのは、それが私の体と魂にもたらす霊的な目的のゆえであり、そのキリストの体と血が、この世的な命のためではなく、霊的で、かつ天上の命のために、この私を養うべく備えられているからである。

さすれば、この体が、霊的な食物が、私の霊的な命に注がれるからこそ、それは霊的と言われるのである。…（中略）…それが地上的な、この世的な命のためではなく、天的な、神聖な、かつ霊的な目的のために、私の魂を養うがゆえに、そのキリストの体は、またキリスト御自身は、キリストの体という点において、sacrament における霊的なものと呼ばれる。さらに、それが備えられた霊的媒介であるからこそ、sacrament において霊的なものと呼ばれる。キリストの体に与る媒介は、物理的な媒介、つまり、身体の歯や口という媒介ではなく、霊的な魂の口、つまり信仰である。その媒介は霊的であるがゆえに、与えられるキリストもまた霊的と呼ばれる。さらには、それに与る方法は、自然的あるいは外的なものではなく、天的で、霊的で、かつ神聖な方法であるがゆえに、sacrament において与えられるキリストの体は、人間の目で見えるような仕方ではなく、霊的かつ神秘的な仕方と与れるがゆえに、これら諸々の理由から、私はイエス・キリストを、sacrament におけるしるしという方法で示される天的で霊的なもの、と呼ぶのである。<sup>26</sup>

<sup>25</sup> Ibid., p. 39.

<sup>26</sup> Ibid., p. 40.

ブルースが強調するのは、徹底して「天的」かつ「靈的」なものとしての sacrament である。それゆえ、この「天的」かつ「靈的」な「キリストのすべて」に与るのは、人間の内に「靈的な口」として授けられた「信仰」である、と論じられる。

## 2.8 主の晩餐に与るための準備の重要性—「悔い改め」の心

ブルースは「キリストのすべて」に与るために不可欠な「魂の口」である信仰を吟味し、そして、キリストのすべてに与るために各々が「悔い改め」の良心を準備することの重要性を指摘する：

キリストはご自分を与えくださるお方であり、私たちはキリストに与るための口を具えなければならない。キリストは御自身を啓示し、御自分を供与してくださるもの、キリストに与る口を具えていない者には、何ら益することも、役立つこともない。さすれば、示されているもの、と私が言っているものが何か、あなたたちには分かるだろう。それはつまり、神であり、かつ人であり、御自身の本性を切り離すことも、御自身の恵みから御自身の実体を切り離すこともなく、すべてを私たちに適用してくださる、キリストのすべてである。

それゆえ、…(略)…何の準備もせずにこの食卓に付いても、そこに何の益もないと分かれば、何も準備をせずに聖なる食卓につこうとは誰も考えなくなるだろう。ある人々は、他の人々よりも細心の注意を払って準備するだろう。…(略)…したがって、あなたたち皆が自ら備えるべきであり、そうしてよりよい状態でその食卓に来ることができるようになるために私が勧めるのは、一人ひとりが、キリストの御前に、自らの潔癖さや公正さ、高潔さを持ち寄って主の食卓に来ることではない。その食卓に集う者は誰であれ、キリストが求めていることを認めつつ、また告白しつつ進み出るべきである。神に対して犯した罪のゆえに、悔い改めの心を携えてそこに進み出るべきである。食卓に集う者は、自分が清く、正しく、高潔であることを訴え出るのではなく、自分が惨めな、しかもあらゆる被造物の中で最も惨めな存在であることを訴え、告白するために、神に対して自らが犯した罪を悔いながら来るべきである。そうすることで、人は自らの惨めさの中にも強さを得るためにその食卓に集い、そして悔い改めの賜物をいただくことで、ますます正しく、清く、堅実に、自らの日々を生きようと願うようになるだろう。

それゆえ、もしもこうしたプロセスを経ずに、そう決心することも、従来の自らの生き方を改めることも、自らの罪を悔い改めることもなく、しかも神の恵みによって、これまでよりも正しく、実直に生きようとしなければ、その食卓に集ってはなら

ない。健全なことを行う意思も悔い改めもないところでは、病的なことを行おうという意思しか残されていない。悪しき思いを抱いたままで、悔い改める志も持たずして、この食卓に来る者は誰でも、キリストを失望させ、キリストの顔を蔑み、自分自身に対する裁きを食べることになる。それゆえ、自らの心に、これまでよりも良いことをしようと思わない者、自分がこれまでに犯した罪を嘆く心を持たない者、そして自らの過去の愚かさや狂気を光の中に照らし出そうとしない者は、何びともこの食卓に来てはならない。裁きに心を痛め、心からの悔い改めがなければ、何びとも食卓に来てはならない。<sup>27</sup>

主の晩餐に与る者に対する「悔い改め」の必要性の主張は、さらに説教の終盤でも繰り返される：

もしあなたたちに悔い改める決心がないなら、あなたたちは sacrament の効用を失うだろう。私が sacrament に与り、その益と効果にも与ることが許されるのは、まさしく悔い改めの決心だけである。それゆえ、sacrament の前に進み出る者は誰でも、自分の心の中にあるその決心を吟味しなければならない。…(中略)…

あなたたちは、自分の心で準備が整ったのが分かるまでは、自らこの食卓に進み出るべきではないことを、肝に銘じていただきたい。その準備の最初の段階は、悔恨、罪への嘆き、また恵み深き神に対して犯してきた自らの罪を感得することである。悔い改める心が流す涙で、キリストの足を洗い、身を屈めてそこに口づけし、そして両手でしっかりと抱きしめた女のように、あなたたちがたとえそれほどまでに大胆にキリストのすべてを抱きしめようとするのがないとしても、あなたたちにそうした心構えができていれば、あなたたちは相応しい状態に至っていることだろう。しかし、もしあなたたちがこれらを一切欲していないなら、またもしあなたたちが、ある程度、そうした心構えを持ち合わせていないなら、いずれにせよ、あなたたちは準備が整っていることにはならない。それゆえ、何びとも、最低限これらのことを具えていなければ、この食卓に進み出ることは許されない。<sup>28</sup>

かなり長く引用したが、上記のように、ブルースは主の食卓に進み出る者、そして主の晩餐に与る者に対して、極めて高い規律意識を促す。ブルースは主の晩餐に与ることがどれほど真剣な営みであるのかを強調する。分けても、神への応答としての信仰の自己吟味と、悔い改めの決心という内省的態度の必要性と、そのための準備が、主の晩餐に与る者に

<sup>27</sup> Ibid., p. 41-42

<sup>28</sup> Ibid., p. 63-64.

対し、厳しく問われている。

## 2.9 「秘義」としてのサクラメント

ブルースは、徹底してサクラメントにおける不可視的な局面を重視する。つまり、水・パン・ぶどう酒といった可視物のしるしを通して示される「不可視的なもの」こそ、本当の意味で配慮されねばならない。そのため、サクラメントを通して神から与えられる不可視の、天的で霊的なものに与るためには、霊的賜物としての信仰が求められる。そのため、人間に授けられている信仰も、また生来的な魂や良心も不可視的なため、サクラメントに与る人間には、見えざる神の前での不断の悔い改めと内省が求められる。この不可視的な次元が重視されるサクラメントは、どこまでも「秘義」である。彼はこう述べる：

どのサクメントも秘義である。崇高で神聖な秘義を含まぬサクラメントなどない。サクラメントが秘義であるがゆえに、秘義的で、神秘的で、かつ霊的な結びつきが、サクラメントの本性と見事に合致するはずである。私たちとキリストとの結びつきが全くの秘義であるがゆえに、使徒が私たちに示すとおり（エフェソの信徒への手紙 5: 32）、秘義的で霊的な結合がそこに含まれる。したがって、疑いようもなく、サクラメントとそれが示すものとの一体性は、同じ本質を具えた、秘義的で霊的なものでなければならない。いかにしてキリストと私たちが一体となるのか、その視覚的な実証をあなたたちに呈示することはできない。この結びつきを理解する者は誰でも、天的な視野と共に、啓蒙された精神を自らに具えねばならない。それは、人が自分の顔に外的な事物を見る目があるのと同様、人は自らの心と魂に、サクラメントにおける神の御子とわたしたちとの間の神秘的で秘義的な一体性を感得する天的な目を持たねばならない。それゆえ、私はもはやこれ以上何も強調する必要はない。もしあなたがこの天的な幻を持たなければ、あなたたちは自分自身とキリストとの一体性を理解することもできず、さらに、サクラメントにおけるしるしとそれによって示されているものとの結びつきを理解することもできない。<sup>29</sup>

## 2.10 可視的なものと不可視的なもの —その関係性における区別と類比、そしてバランス

しるしとそのしるしが示すもの、つまり、可視的なものが示す不可視的なものは、その関係性において混同してはならず、明確に区別しつつ、しかしながら、両者は秘義的、神秘的、霊的に一つに結び合わされ、一体化している。この可視的次元と不可視的次元を整

<sup>29</sup> Ibid., p. 45.

理することが、ブルースが展開する聖餐論を理解する上で重要な課題となる。特に sacrament は「見える御言葉」として「可視化」されるものの、信仰によって与えられる「キリストのすべて」は、どこまでも不可視的な次元のままである。ブルースはこう述べる：

sacrament は見える御言葉に他ならない。なぜ私は sacrament を見える御言葉と呼ぶのか？ なぜなら、 sacrament は目から私たちの精神にそれが意味する事柄を伝えるからである。ちょうど聞くことのできる言葉において、そこで示されていることが、聞くことで私たちの精神に伝わるのと同じ様に、その同じ sacrament において、説教と sacrament の解説と共に、あなたたちがその sacrament を目で見ると、あなたたちはそこで自分の目でパンを見るやいなや、キリストの体はあなたたちの精神の中に来てくださり、あなたたちがぶどう酒を見るやいなや、キリストの血があなたたちの精神の中に来てくださるのである。<sup>30</sup>

さらに、聖餐式はパンとぶどう酒に与えるという身体的リアリティを超えて、「キリストのすべてに与える」という霊的リアリティこそが重要になる。そのため人間にはこの不可視的な、霊的リアリティに与える媒介として信仰が備えられている。ブルースは聖餐における信仰の必要性をこう説明する：

そこには二種類の行為があるのと同様に、しるしとそのしるしによって示されるものが差し出される二種類の方法がある。なぜなら、示されたもの、つまりキリストは、決して私たちの身体的な口に差し出されているわけではないからであり、御言葉においても sacrament においても、キリストの血やキリストの体、キリストの全体、あるいはキリストの霊は、わたしの身体の口に差し出されているわけではないからである。もし信仰以外に、キリストに与る何か別の方法を発見できる聖書の箇所があれば、私に呈示していただきたい。私が申し上げてきたとおり、手も口も、私たちがキリストを受け止める媒介ではない。それはただ信仰だけである。示されたキリストが信仰の手と口によってしっかりと捉えられる時、キリストを示すしるしは私たち自身が生まれつき持っている口と手でしっかりと捉えられる。あなたたちには、自分の理性にも肉体にも、しるしを受け止めるために設けられた固有な媒介となる口があるのだ。つまり、信仰こそ、キリストを受け止めるべく備えられた固有な媒介である。したがって、しるしと示されたものは、一つの媒体にではなく、二つの媒体に、すなわち、一つは身体の口、もう一つは魂の口に差し出され、与えられるのである。<sup>31</sup>

<sup>30</sup> Ibid., p. 47-48.

<sup>31</sup> Ibid., p. 56.



さらに、先に指摘した通り、ブルースは、パンとぶどう酒だけでなく、聖餐式そのものを「しるし」と位置づけていた。そこで、可視的な聖餐式における不可視的な局面についても、ブルースは次のように述べる：

外的な行為と内的な行為とを区別すること、しるしと示された事柄とを区別すること、そして内的な行為と外的な行為との間のバランスと類比を保つことは、あなたたちが行わねばならない。もしあなたたちが信仰的であるならば、あなたたちは、牧師があなたたちの身体に関しては外的に働いているのと同じように、キリストがあなたたちの魂の内側で、常に内的に働いてくださっている、と確信することであろう。牧師がパンを裂き、ぶどう酒を注ぎ、あなたたちにパンとぶどう酒を配餐する際に、いつもどう動いているのか理解していただきたい。キリストは、それと同じように働いてくださっており、霊的で、目に見えない仕方、あなたたちのために御自身の体を裂き、そして御自分の肉体の血を与えてくださっておられるのである。この区別を保持すれば、あなたたちは、牧師が外的にあなたたちの体と共にあるのと同じように、信仰によって、キリストは自分たちの魂を十分に満たして、養ってくださると、自ずと確信するようになるだろう。…(中略)…

以上で述べてきたことから、 sacrament は二層の、あるいは二重の様式から成るとの結論に、私たちは到達する。 sacrament は、二種類の素材、つまり、地上的な素材と天的な素材、しるしと示されているもので成り立っている。そして、 sacrament の中に二重の事柄が存在するならば、 sacrament は、外的な行為と内的な行為によって、二重の仕方、扱われなければならない。<sup>32</sup>

### 2.11 わたしたちの内で生きるキリストを感得すること

ブルースは主の晩餐に与るために「あなたたちがなすべき最大の努力とは」と勧告して、「あなたたち自身の魂の内に生きておられるキリストを見出すこと」の必要性を訴える：

あなたたちがなすべき最大の努力とは、自分たちの心の中にキリストが生きておられることを感得し、自分たちの心の中でキリストを見出し、自分たちの精神でキリストを理解し、そうして御言葉と sacrament の両方が効果を発揮することのために傾注すべきである。もしそうでなければ、あなたたちが考えているようには、死から移し替えられてはならず、あなたたちの魂はなお死んだままである。それゆえ、キリスト者たちが sacrament を目の当たりにし、そして御言葉を聞く際に、自分たちが聞き、

<sup>32</sup> Ibid., pp. 56-57.

自分たちが見ることを、自らの心と精神の内側で見出し、感じることに、自らの関心を全て注ぐべきである。このことが、あなたたち自身の魂の内に生きておられるキリストを見出すこと、と私が名付けることである。あなたたちがキリストの住処を清めなければ、これは起こり得ない。<sup>33</sup>

本来的には、主の晩餐において人間の側の努力で、何らかの効果が生まれたり、創造されたりすることはない。それでも尚、人間の側になすべき努力があれば、それは自分自身の「心、精神、魂」の内で、使徒パウロが語るように「生きておられるキリスト」を感得し、キリストを見出すことである<sup>34</sup>。

### 2.12 サクラメントを無益にする要因

最後に、主の晩餐のサクラメントを無益なものに貶めてしまう事柄について、ブルースは警鐘を鳴らす。それは二つの点、聖餐式の形式と関わるものと、サクラメントの執行者と受領者の両方の人格と関わるものに集約される。前者においては「式の省略」である。彼はこう述べる：「主の晩餐において、もしあなたたちが極めて些細なことでも式を省いてしまえば、もはやそれはサクラメントではない」<sup>35</sup>。ここで彼が想定しているのは、この直後にローマ・カトリックのサクラメントの実践に対する批判が示されている点を考慮すれば、パンのみを配る「一種陪餐」を指していると思われる。さらに、不適格な執行者が行うサクラメントや、悔い改めの決心を欠如した者が与るサクラメントも、サクラメントの効用を失い、それを無益なものにすると論じられる。執行者の適性・不適性の事例や、不適性を判断する根拠などについては全く触れられていない。しかし、与る側の不適性に関しては、既に言及した「信仰」と「悔い改め」の必要性を欠くことが指摘され、先に「2.8」で引用した、悔い改めの勧告が述べられる。

## 3 ま と め

以上、『主の晩餐の秘義』の第一説教における彼自身の言説に即して、ブルースの聖餐論を概観した。一篇の説教とは言え、その分量の大きさもさることながら、内容も十分に汲み尽くせぬほど多岐にわたり、コリントの信徒への手紙一 11 章 23 節の説き明しの範疇を遥かに越え、実際に、この紙面では言及できない点を幾つも残している。それでも、こ

<sup>33</sup> Ibid., p. 61

<sup>34</sup> 「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きていますのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです」(ガラテヤ 2: 20)

<sup>35</sup> Bruce, op cit., p. 64.

ここで呈示された要点は、「総論」として、彼の聖餐論の全体的な骨格を成していると言えよう。

ブルースは「しるしと、そのしるしが示すもの」をテーマにしなが、聖餐式全体を取り巻く「可視的なものと不可視的なもの」、「地上的なもの」と「天的・靈的なもの」という二つの層を正しく識別することの重要性を、幾つもの箇所でも展開する。一見すると、明確な二元論的構造を持つ聖餐論に思えるかもしれない。しかし、ブルースの視点は両者を「あれかこれか」の対立軸で捉えるのではなく、この両者の「関係性」を把握しつつ、聖霊の働きにおいて、両者の「一体性」を捉え直す必要性を指摘する。

聖餐はパンとぶどう酒という可視的な物素、またパン裂き等の牧師の所作を含む可視的な儀式全体を通して、不可視的なものに与る「靈的な」営みである。しかも、その靈的営みにおいて、晩餐に与る者には「キリストのすべてとの一体性」がもたらされる、との壮大な靈的ヴィジョンが提示される。可視的なもの（地上のもの）と不可視的なもの（天的・靈的なもの）との一体性は、究極的には「秘義」である。だが、この秘義はキリストの受肉の秘義と同質のものであり、それゆえに、この秘義においては「聖霊の働き」は不可欠である<sup>36</sup>。さらに、「キリストのすべて」を示す主の晩餐は、受肉のみならず、十字架、復活、高挙、そして再臨（終末）、というすべての局面からキリストを全体的かつ包括的に正しく理解する必要がある。このように、ブルースの聖餐論は「聖霊論」を土台とし、「キリスト論」を柱としつつ、神の秘義的恩寵としての「恵みの契約」を呈示すると言えよう。

他方で、ブルースの聖餐論の顕著な特徴は、主の晩餐に与る者に求められる「準備」の強調である。ブルースが陪餐者たちの良心に問うのは、どれほど真剣に、真実に、主の晩餐に与ることを求めているかという点、つまり「パンとぶどう酒」の物素に与ることではなく、そのしるしが示す「キリストのすべて」に与ることを求めているかという点である。主の晩餐は、靈的な糧として、キリストのすべてを与えるために、神御自身が選んだ手段であるため、この不可視的な靈的リアリティに与るためには、霊の賜物としての信仰（ブルースはそれを「魂の口」と表現する）が求められる。しかも、パウロの「わたしではなく、キリストが」（ガラテヤ2：20）という靈的リアリティを内的に感得することが要請される。彼は、主の晩餐に参加する時だけでなく、主の晩餐に与る前から備えるべき真剣な信仰姿勢を問う。この強調点は、先の「恵みの契約」に対し、人間の側の応答、すなわち「行いの契約」と類比させることができる。主の晩餐において、聖霊の働きにより「キ

<sup>36</sup> 受胎告知の場面での御子の受肉における聖霊の働きについては、ルカによる福音書2章を見よ。また使徒信条において「主は聖霊によりてやどり」と告白される通りである。

リストのすべて」を与える神の恵みが強調されればされるほど、ますます、人間の信仰的応答としての「悔い改め」の準備も強調され、どちらか一方だけを強調し過ぎることは、ブルースにとっては、バランスを欠くことである。それゆえ、ブルースの第一説教では「契約」の語が使用されることはないものの、「契約神学」の構造を具えた聖餐論が提示されており、 sacramentを神と人との「契約関係」の中で捉え直す必要性を示している、とすることができる。さらに、このことから、十七世紀以降、スコットランドを席卷する契約神学の萌芽をこの中にも見出すことができよう。

今日の日本においても、改めて「契約」の観点から聖餐について再考する必要がある。特に、ブルースが強調する「準備」を、私たちがどれだけ真剣に取り組んでいるかについては、しっかりと吟味しなければならない。

『主の晩餐の秘義』の第二から第五説教において論じられる、聖餐論の「各論」については、次の機会に論じることにする。